

# ジャーナリズム，新聞，幻滅，そして「ことば」

## —カール・クラウスによるバルザックの引用について—

堺 雅 志

Si la Presse n'existait point,  
faudrait-il ne pas l'inventer ;  
mais la voilà, nous en vivons.

Wenn es keine Presse gäbe,  
brauchte man sie nicht zu erfinden;  
aber sie ist da, und wir leben davon.

もしジャーナリズムが存在しないのであれば、  
まちがってもそれを作り出してはならない。  
だが実際には存在し、ぼくたちはそれによって生きて  
いる。<sup>1</sup>

Honoré de Balzac (1799-1850)

### はじめに連載ありき

1974年の日本は空前のドラえもんブームであった。単行本が第一巻から第五巻まで矢継ぎ早に出版され、翌75年1月1日には第六巻が発売されて、お年玉を握りしめた小学生たちが書店に列を作ったものであった。その第三巻に収録されたエピソード「ライオン仮面」は、同名のマンガ連載に苦しむ漫画家フニャコフニャ夫先生を助けようとする物語で、この連載漫画のプロットどおり、失敗に終わる。

ドラえもんたちは、「少年ザンネン」の愛読者で「ライオン仮面」はそのなかでもっとも人気のある連載マンガのひとつとして描かれる。主人公ライオン仮面が絶体絶命のピンチでその号は終了、次回に続く。ドラえもんはタイムマシンを使って未来から次の掲載誌を持ってきて、得意げに仲間たちに続きを話して聞かせている。そこに、締切を振りかざし漫画家を追い詰める編集者か

ら逃げてやってきたフニャ夫先生が出てくる。

実は作者のフニャ夫先生は、次号にどう続きを書いていいのか分からない。フニャ夫先生はドラえもんに助けを乞うが、未来の先生は弟の設定の「オシシ仮面」を登場させるも行き詰まり絶体絶命にさせ、いとこの「オカメ仮面」を登場させてはまた絶体絶命に陥らせと、これが続いていって収拾がつかなくなり大混乱で終わるというお話である。<sup>2</sup>

締切に苦悩する作家、それに迫る編集者という図式は、このときマンガを通して二十世紀の日本の子どもたちにはなじみの構図となった。この「連載」という形式は、広い意味での「ものがたり」を享受するかたちとして、現在なじみ深いものである。けれども連載というものがたりの享受のあり方が、十八世紀末にはじまり、そして十九世紀に飛躍的に発展を遂げたものだということを浅学の徒が知るに至るのは、カール・クラウス研究を契機にジャーナリズムの歴史を調べた末に辿り着いてのことだった。

一般に新聞連載小説の嚆矢は、ウージェーヌ・シューの『パリの秘密』(1843)とされているが、1822年のドイツにおいて、ドラえもんのエピソードに見られるような連載小説のパロディが、ルートヴィヒ・ティークによって小説『秘密にみちた男』(1822)のなかに描かれていたことに鑑みると、<sup>3</sup>『パリの秘密』についての言説は、その記念碑的成功ゆえの常套句であることが見てとられる。いずれにせよ、十九世紀は新聞小説の華々しい最初期であったことは言を俟たない。この時代の花形作家としてオノレ・ド・バルザックは、ジャーナリズムを縦横に活躍していた。そして『パリの秘密』の成功の同年、バルザックは小説『幻滅』(1843)において、自らが身をおくジャーナリズムの内奥をあばき、風刺したのであった。

<sup>1</sup> Honoré de Balzac: *Illusions perdues*. Dans: *La Comédie humaine*, t. 4. Paris 1949-59, p. 737. Karl Kraus: *Der Journalismus von Honoré de Balzac*. In: *Die Fackel* (in 12 Bänden). Frankfurt a.M., Nachdruck von Karl Kraus: *Die Fackel* (in 39 Bänden). München 1968-1976, Nr.283-84, S.15. オノレ・ド・バルザック『幻滅』、『バルザック「人間喜劇」セクション』第4巻、野崎歓他訳、413ページ。

<sup>2</sup> 藤子不二雄「あやうし！ ライオン仮面」、『ドラえもん』第3巻、小学館、1974年。

<sup>3</sup> 詳細は、拙論「芸術か娯楽か—ジャーナリズムと十九世紀ドイツ語文学を巡る諸問題の布置—」福岡大学人文学部論叢第44巻第4号、2013年、789-801ページ参照。

バルザックの作品は1830年代から個別にドイツ語に翻訳されはじめる。これは晩年のゲーテによるバルザック礼讃によるところが大きい。ドイツ語圏でバルザックの人気が高まり、1841年から1846年にかけて、全八十二巻からなる『バルザック全集』がドイツ語訳で出版される。<sup>4</sup>このうちの一巻として、『幻滅』はフランスでの出版のわずか三年後、1846年にドイツ語に翻訳されている。そして二十世紀初頭に、バルザックの小説集成『人間喜劇』が新たにドイツ語に翻訳され、ドイツ語圏の文化人のあいだで、バルザック熱が再燃する。カール・クラウスもその魅力に取り憑かれた一人であり、信奉者となるのである。

### カール・クラウス、バルザックを発見する

十八歳の若さでジャーナリズムの世界にデビューしていたカール・クラウス (1874-1936) によるバルザックへの言及は、往時すでに巨大化していたジャーナリズム産業とは袂を分かつべく自費出版しはじめた個人誌『炬火』第二号 (1899年四月中旬号) にすでに見られる。『炬火』第一号の爆発的反響によってクラウスは二十五歳にして、時代の転換期には何を発言するのかが巷間で注目されるほどの寵児となる。とりわけ二十世紀二度の世界大戦に関連して、彼の発言あるいは沈黙は、世界の注目の的となった。<sup>5</sup>

生涯にわたって発行する『炬火』誌上でクラウスは、かなりの頻度でバルザックに言及している。クラウスが、バルザックに言及、引用した箇所を示すと以下のようになる。<sup>6</sup> (数字は、「号数／ページ数」で示しているが、バルザックからの直接引用部分は太字で、号数と発行年、ページ数に下線、題目を示した。『幻滅』のテキストは、「付録1」を、『ルイ・ランベール』のテキストに関しては、「付録2」を参照。)

『炬火』 *Die Fackel*  
2/30; 5/22; 23/3; 69/37; 101/14; 148/1; 209/13;  
283-84 (26. Juni 1909)/  
1-18: *Der Journalismus, Illusions perdues*;  
290/5-12; 298/47, 49; 366/25 f.; 595/64, 68, 70; 608/58; 640/65;  
668-675 (Dez. 1924)/

52,  
94f.: *Das Wort, Louis Lambert*;  
705/115; 712/92;  
717-723 (Ende März 1926)/  
3-5: *Die Presse von Honoré de Balzac, Illusions perdues*;  
63;  
726/74; 732/47; 743/78, 105, 120; 759/94; 766/83; 771/81;  
787/83;  
800-805 (Anfang Feb. 1929)  
26f.: *Im dreißigsten Kriegsjahr (Gesprochen in der 300. Wiener Vorlesung am 30. November), Illusions perdues*  
806/12, 14; 811/39

1899年の『炬火』第二号から十年間のバルザックの誌上での登場を眺めると、クラウスが批判するテキストに引用されているものが多く、バルザックはクラウスにとってひとつの概念でこそあれ、のちに直接引用するほど思想的親近性を示す存在ではなかったようである。けれども1908年から11年にかけてライプツィヒのインゼル出版より刊行されたドイツ語新訳版『人間喜劇』全十六巻が、クラウスとバルザックとの関係を瞬く間に深化することとなる。『人間喜劇』は、ドイツ語圏に讃嘆の声とともに迎えられた。クラウスと同年の詩人ホフマンスタールも賛辞を送ったひとりである。<sup>7</sup>クラウスは、バルザックを『炬火』に恭しく迎え入れることとなる。それが、1909年六月二十六日付の『炬火』巻頭から十八ページを飾る「オノレ・ド・バルザック『ジャーナリズム』」と題された『幻滅』からのコラージュである。『幻滅』は『人間喜劇』の長編小説の中でも大作とされる。そのプレイヤード版でもおよそ七十ページを超える部分から、ジャーナリズム批判の核心を切り抜き、縫いあわせ、切れ目なく読むに値するコラージュ作品に仕立て上げた本作は、クラウスの引用技法の粋といえる (付録1参照)。

新聞の文芸欄として人口に膾炙する「フェュトン」に関してバルザックは、あるところでこう書いている。

ジョフロワはフェュトンの父であった。このフェュトンというものは、パリにのみ属する発明品であり、パリ以外のところでは存在しえない。いかなる国であろうともこうした才気の横溢、あらゆる手段を駆使し

<sup>4</sup> バルザックのドイツ語での出版事情については、Bernd Kortländer / Hans T. Siepe (Hrsg.): *Balzac und Deutschland — Deutschland und Balzac*. Tübingen 2012, S.20 f. に拠った。

<sup>5</sup> 第一次世界大戦前、多くの文人が大ドイツ主義を唱え、ドイツおよび、オーストリアの宣戦を擁護したが、クラウスは、声高に戦争と戦争を巡る言説批判を展開する。彼は早くから、反戦の態度を取り、参戦に賛同する当時の多くのドイツの知識人とは対立する論陣を張る。そしてその間執筆された戯曲『人類最期の日々』は、戦後アカデミー・フランセーズがノーベル文学賞に推薦する契機ともなった。1936年に没するクラウスは、第二次大戦を経験はせぬものの、台頭するナチズムに対して主に沈黙をもって抗する。しかし沈黙の背後で執筆されていた『第三のワルブルギスの夜』が戦後出版され、クラウスの反戦思想が改めて評価されることとなった。

<sup>6</sup> 表の作成にあたっては、Franz Ögg: *Personenregister zur Fackel von Karl Kraus*. Marbach 1981 を参照した。

<sup>7</sup> BK (2012), S.22.

での嘲弄、途方もなく浪費される理性の数々といったものを見いだすことは不可能であろう。<sup>8</sup>

ドイツ語圏におけるフェュトンの最初の受容は、フランスの新聞のフェュトンをもそのまま転載したものであった。十九世紀前半のジャーナリズムの状況を活写した小説『幻滅』の中で、フェュトニストをはじめとするジャーナリストたちと宴席を共にしていたドイツ公使が、彼らの才気煥発なやりとりを辟易し、「わが国に新聞がないことを感謝しますよ」と嘆息するのも、ドイツにおける当時のジャーナリズムの後進性を示すひとこまである。

バルザックと同時期のパリに生活し、そこから最新の情報をドイツの新聞に提供したハインリヒ・ハイネ(1797-1856)は、通信文『フランスの状態』をアウクスブルクの「一般新聞」に送り、フランスの最新の文化状況を伝え、多くの読者を獲得した。<sup>9</sup>ハイネの活動を通じ、ドイツ語圏のフェュトンは大きな発展をみるのであるが、カール・クラウスはハイネを、ジャーナリズムをドイツに移植した元凶として生涯にわたって批判し続ける。

そして不気味なのは、言語の輝きがガチョウのレバーからできていることがいかに知られていないか、そしていかに多くのひとが言語の輝きをすくいにとって、家庭でパンの上に塗りたくっていたかである。鼻はつまり、目は盲いているが、耳はどんな流行歌も聴く。かくしてハイネのお陰でフェュトンという発明は最高度の完全性を持つまでに発展した。(Bd. 4, S. 206)<sup>10</sup>

フランスのフェュトンの転載から始まり、ハイネのフランス事情の紹介を経て、ドイツ語圏の文化紹介へと着実に進歩したフェュトンが、クラウスが批評活動を展開した二十世紀には、どれほど普及していたかが看取できる。フランスからジャーナリズムの発展を後押ししたハイネではなく、フランスでジャーナリズムの正体を白日のもとにさらしたバルザックにどれだけクラウスが共鳴していたかは、バルザックの「ことば」が『幻滅』に反復される事実が示している。

## バルザック、カール・クラウスに共鳴する

本論の献詞とした「もしジャーナリズムが存在していないのであれば、まちがってもそれを作り出してはならない」とは、バルザックが『幻滅』のある登場人物に言

わせた台詞である(付録1、波線部)。しかしジャーナリズムは存在し、そのなかでわたしたちは生きている。この逃れえぬ事実に向け、批判を展開してきたクラウスの思想とバルザックの「ことば」とは、共鳴しつづけた。クラウスはこのコラージュからバルザックの「ことば」を炬火誌上でさらに二度呼び出している。

1926年三月末付、『幻滅』第717-723号にて「オノレ・ド・バルザック『新聞』」*Die Presse Von Honoré de Balzac*として再録される(付録1、下線部)。

新聞は聖職者の機能を果たさず、党派的な手段に成り下がっている。そして手段を商売にしてしまった。どんな商売でもそうだが、こうなると信念も掟もない。どんな新聞だって、読者に対して好きな色合いの言葉を売る店なんだ。新聞は今や世論の啓蒙のためではなく、世論におもねるために作られているわけだ。だから必然的に、すべての新聞が卑怯で、偽善的で、おぞましく、うそつきで、殺人的になるわけだ。思想も体系も人間も殺し、それによって栄えるんだ。新聞はあらゆる抽象的存在の持つ利益を得るようになるだろう。悪がおこなわれても、誰の罪にもならなくなる。これを道徳的とか不道徳的とかはきみたちの自由だが、とにかくこの現象をナポレオンがうまく説明した。国民公会についての研究中にひらめいた素晴らしい言葉だよ。『集団的犯罪はなんびとも責任を負わない』というんだ。新聞が思いっきりひどいことをやっても、個人的には誰も自分が汚れたとは思わないわけさ。新聞が下劣な中傷をでっち上げたとしても、誰かに吹きこまれて書いたということになる。文句を言うやつがいれば、あけすけに申し上げて失礼いたしましたと謝ればすむこと。裁判沙汰になった場合は、訂正記事を要求しに来なかったじゃないかと言って逆にこちらから文句を言う。だが訂正記事を要求しに来たらどうするか? 笑い飛ばして拒絶し、大した罪じゃないと言い張る。要するに、相手が勝つとしても、こちらは犠牲者をとことん馬鹿にしたことにならない。処罰を受けたり高額な罰金を科せられたりしたら、告訴してきたやつのことを、自由と国民と啓蒙の敵であるかのように書きたててやる。こうすれば、新聞の罪などほんの些細なこと、新聞を攻撃する人間こそは怪物ということになる。こうして決められた時間で、こちらの思うままのことを、毎日読者に信じこませることができるわけだ。それからまた、新聞の氣にくだらないことは、何でもかんでも非国民呼ばわ

<sup>8</sup> Honoré de Balzac: *Monographie de la presse parisienne*. Paris 1981, p. 148. 翻訳は、バルザック『ジャーナリズム性悪説』、鹿島茂訳、ちくま文庫、1997年に拠ったが、「学芸欄」を「フェュトン」と置き換えた。

<sup>9</sup> ハイネは知己をえていたバルザックに関する記事も「一般新聞」に書き送っている。Bernd Kortländer: *Balzac und Heine — Heine und Balzac*. In: Bernd Kortländer / Hans T. Siepe (Hrsg.): aa.O., S.119 f.

<sup>10</sup> Karl Kraus: *Heine und die Folgen*. In: *Karl Kraus Schriften in 20 Bänden*. Hg. von Christian Wagenknecht. Stuttgart 1986.



りする。そして新聞には決して誤りはない。宗教を叩くために宗教を利用し、国王を叩くために憲章を利用する。司法官に感情を害されたらお返しにぶっ叩くし、司法官が大衆に受けているのならよいしょしておく。購読者を獲得するためには、涙ちょちょぎれる感動話をでっち上げ、ボベーシュのように客寄せをする。新聞は読者の興味を引きつけたり、読者を楽しませたりするためになら、自分の父親だって冗談のネタにしてしまうんだ。

最初のうちこそ名誉ある人々に指導されていた新聞も、才能ある人にはとても無理なくらい辛抱強く、ゴムみたいに気の弱い凡庸極まりない連中に支配されるか、ペンを買収するだけの金を持った町の商人たちの手に落ちるかだろう。そういう現象は今にしてすでに見られるじゃないか。だが十年もたてば、中等学校を出たての若造が自分を偉人だと思いこみ、新聞記者として登場し、先輩に平手打ちをかまし、足を引っ張って地位を奪い取るんだぜ。ナポレオンが報道の自由を規制したのはもっともなことだったよ。

ジャーナリストに譲歩すればするほど、新聞はいっそう扱いづらくなる。成りあがったジャーナリストに代わって、貧しい餓えたジャーナリストが登場するからね。傷は治療不可能、どんどん悪性になり、どんどん傲慢になっていく。悪が大きくなればなるほど、いっそう大目に見られ、しまいにはかのバベルの塔みたいな、新聞の数が増えすぎて業界に混乱が生じてくる。恩知らずなことにかけて新聞は国王よりさらに上をいき、投機や打算にかけて最もあくどい商売のさらに上をいく事くらい、ぼくたちは皆知っている。毎朝脳のブランデーを売るために、ぼくたちの知力が使い作られてしまうこともね。それでもぼくたちは新聞に書き続けるだろう。

『幻滅』のコラージュの分量の約十分の一相当を、しながらモノログのように削り出している。そしてこのモノログの中からさらに絞り込んだ箇所を、クラウドは1929年二月初旬付第800-805号にて「戦争三十周年において（十一月三日第三百回ウィーン朗読会にて）」*Im dreiBigsten Kriegsjahr (Gesprochen in der 300. Wiener Vorlesung am 30. November)*という記事の一部として再々録しているのである（付録1，網掛部）。

バルザックは、新聞についてどのように予言しているだろうか。

〔新聞は〕思想も体系も人間も殺し、それによって栄えるんだ。新聞はあらゆる抽象的存在の持つ利益を得るようになるだろう。悪がおこなわれても、誰の罪にもなくなる。〔……〕

新聞が思いっきりひどいことをやっても、個人的には誰も自分が汚れたとは思わないわけさ。〔……〕

彼がいうには、「新聞は自分の罪について、大した罪じゃないと言い張る。」告訴してきた者を、「自由と国民と啓蒙の敵であるかのように書きたてる。」

こうすれば、新聞の罪などほんのささいなこと、新聞を攻撃する人間こそは怪物ということになる。こうして決められた時間で、こちらの思うままのことを、毎日読者に信じこませることができるわけだ。それからまた、新聞の気に食わないことは、何でもかんでも非国民呼ばわりする。そして新聞には決して誤りはない。〔……〕購読者を獲得するためには、涙ちょちょぎれる感動話をでっちあげ、ボベーシュのように客寄せをする。新聞は読者の興味を引きつけたり、読者を楽しませたりするためになら、自分の父親だって冗談のネタにしてしまうんだ。

とバルザックは言っているが、補足すれば、新聞は、自分の父親が癌に冒されていたとしたら、センセーショナルな希望をつなぐ道化師の綱に父親を喜んで括り付けて、治るかもしれないとふれまわる。決定的な癌の特効薬が見つかったという誤報を諦めるくないなら、それより前にむしろ希望が潰えたことに絶望させておくことであろう。というのも新聞にとって快癒よりも重要なのが報道であるのだから。教養人は相変わらず、ジャーナリストとの対話に巻き込まれるという抗いがたい強制に抵抗できずにいる。

このように、バルザックの引用にクラウドは語りかけ、ことばを重ね合わせる。これは題からもわかるとおり、長年好評を博して不定期に継続されたクラウドの朗読会の第三百回目のウィーンでの朗読会で読まれた講演原稿である。前号の『炬火』の裏表紙には、朗読会の予告が刷られているが、入場券は完売と書かれている。バルザックのことばは、クラウドと共鳴し、ウィーンのコンサート大ホールでも半世紀以上の時を経て、鳴り響いていたのである。

## おわりにことばあらん

「ぼくは一つの言葉に乗り込んで、過去の深淵をたびたび楽しく旅したよ」と、ルイ・ランベールは語る。「あらゆる存在物とおなじく単語は、その特性が十分に働き発展できる場所を一つしかもたない。しかしこの主題には恐らく一つの学問全体が含まれているね。」（付録2，*Die Fackel* Nr. 668, S. 94, Bd. 7, S. 283）<sup>11</sup>

一つの言葉、一つの単語に無限の可能性の深淵を見る主人公を据えた小説『ルイ・ランベール』は、『人間喜劇』のなかで「哲学的習作」と称される小説群のひとつ



に数えられる。

バルザックとクラウスの両者が展開したジャーナリズム批判は、ジャーナリズムを消し去りはしなかったが、なにをもたらしただろうか。おそらくそれは、深い懐疑の奥に仄かにだが、きっと輝いていることばへの揺るぎない信仰である。言語の無限の可能性を、ジャーナリズム批判としての言語批判から汲みとったクラウスは、晩年の仕事として、論集『言語』を編むことに専心する。<sup>12</sup>生前に完成を見ることのなかった論集は、友人フィリップ・ベルガーの手によって1937年に出版される。論集の掉尾は、クラウスの言語論の集大成ともいえる論考『言語』が飾る。そしてこの論集には、バルザック『ルイ・ランベール』からの引用である『ことば』も配されている。バルザックの言語哲学と、クラウスの言語論が並べ置かれたのは、編集の後を引き継いだ編者のクラウスへのオマージュであると同時に、クラウスからバルザックへのオマージュでもあるだろう。

<sup>11</sup> Karl Kraus: *Das Wort. Von H. de Balzac*. In: a.a.O.

<sup>12</sup> 詳細は、拙論「ことば、この汲み尽くしえぬもの—カール・クラウス『言語』精読—」福岡大学人文学部論叢第50巻第4号、2019年、1031-1043ページ参照。

\*以下【付録1, 2】の〔 〕内は省略されている邦訳書の章見出し、台詞の発話者、クラウドによる省略箇所を示し、【 】内はドイツ語訳で変更された語句の補足を示す。

#### 【付録1】クラウドによる『幻滅』コラージュ

\*『幻滅』コラージュのテキストは『炬火』283-84 (1909年6月26日)号にて「オノレ・ド・バルザック『ジャーナリズム』」*Der Journalismus Von Honoré de Balzac*として初出。下線部は、717-723 (1926年4月)号にて「オノレ・ド・バルザック『新聞』」*Die Presse Von Honoré de Balzac*として再録された箇所。網掛部は、800-805 (1929年2月初旬)号にて「戦争30周年において (11月3日第300回ウィーン朗読会にて)」*Im dreißigsten Kriegsjahr (Gesprochen in der 300. Wiener Vorlesung am 30. November)*の一部として再々録された箇所。破線部は題詞の部分を示す。

#### 【新聞の姿】

〔退役軍人〕「〔……〕ええと新聞は、町や執筆者の家や印刷所で、十一時から真夜中の間に作るんだ。ナポレオン皇帝の時代には、こんなしょうもない新聞社なんてなかったな。いやはや、皇帝ならば四名の兵卒と一名の伍長に一言言うだけでそんなものぶつつぶし、今の時代の連中みたいにあれこれくだらぬ言葉に悩まされることもなかっただろうがね。〔……〕記者連中は紙と格闘するより、女優をはべらせご馳走を食べる方がお気に召しているからな。」

#### 【ソネ、ありがたい忠告】

〔ルストー〕「〔……〕フランス座に戯曲の一つ採用してもらったが、そのあとは一文なしになってしまった。フランス座でひいきに預かるためには、大貴族や一等侍従官の庇護があるくらいでは充分じゃない。役者たちは、自尊心を脅かすほどの人物にしか服従しない。あの若き二枚目は喘息持ちだとか、娘役の女はどこかにこぶがあるとか、侍女役の口臭は飛ぶ蠅も殺すだとか、そんな噂を立てる力があるなら、明日にでも作品は舞台にかけられる。〔……〕どこで、どうやって何を使って飯代を稼ぐか、これが餓えに苦しめられたあげく、自分に問うた問題なんです。いろんなことをやってみた。匿名で小説を書き、ドグローに二百フランで買い叩かれたこともある。ドグローもほとんどもうけはなかったけれど。結論としてジャーナリズム以外に飯の種はないことがわかった。だがどうやったら新聞社に入れるのか？ いたずらに奔走したり頭を下げたりした話はやめておきます。臨時雇いとして半年雇われ、読者をうまく手なずけたというのに、その逆に、読者を怖がらせているなんて噂を立てられたあたりのことも、やめておく。〔……〕

フィノは編集長もやっている。おれは紙上で好意的な

批評がほしい劇場支配人たちがくれるチケットや、本屋が送ってくれる書評本とかを転売して、生活しているんです。要するに、商売人が現物で持ってくる貢物の、フィノのおこぼれをもらって売り物にするわけ。肝心の記事は、フィノの指示どおりにほめたりけなしたり。〈駆風美顔水〉、〈後宮美女強力クリーム〉、〈スカルプ・オイル〉、〈ブラジル薬用水〉なんて化粧品類なら、カスみたいな記事一つで二、三十フランになる。社にちょっとしか寄贈しない版元には噛みついてやらねばならない。新聞社が二部取って、フィノがそれを転売する。おれだって売る本は二冊くらいないと。傑作を出したって、たんまり寄贈しない版元はぶっ叩く。おぞましいでしょう。でもこれがおれの仕事なんだ。他の多くの連中みたいにね。政界の方が文壇よりもまだ美しいなんて、思わないでくださいよ。この二つの世界では何もかもが腐っている、そこにいる人間は腐敗させる側か腐敗させられる側のどちらかに分けられるんです。

いくらが大規模な出版事業だと、版元は叩かれるのだけはごめんとばかり、袖の下をよこす。〔……〕女優たちもほめてもらうために金を払うが、中でも抜け目ない女になると、金を出して批判してもらうんです。黙殺ほど恐ろしいものはないから。だから、ほかから反論されることを実は狙って書いた批判は、明日になれば忘れられるさらりとした賛辞よりも価値があり、その分ずっと金になる。論争こそ、名声への踏み台なんですよ。思想の殺し屋として、また商品、文学、芝居の評判を手玉に取る殺し屋として、おれは月に百五十フラン【五十ターラー】稼いでいる。小説を五百フランで売らせることだってできるから、まわりからは恐るべき男と思われ始めている。

お大尽気取りの薬局雑貨店主の目をごまかしてフロリーヌのところに転がりこんだりせずに、ちゃんと家に住み、大新聞で文芸欄を担当するようになれば、その日こそフロリーヌは大女優になっているでしょう。しかしおれは何になっているだろうか。大臣か、それとも普通のまっとうな市民か、今なら何でもまだ可能か。〔……〕だがおれだって、傑作悲劇が一つ採用されたことがあるんだ！ 原稿の中にはこのまま陽の目を見ないだろう詩が一篇ある！ おれだって純情だった！ 清らかな心を持っていたんだ！ 〔……〕今じゃ本屋がたった一冊寄贈をけちったばかりに、素晴らしいと思う本をけなしまくるんだ、このおれは！ 〔……〕

文壇以外のところだと、こんなどろどろした内幕を知っている人間は一人もいない。これ乗り越え、それぞれの才能に応じて、人気、流行、評判、名声、好評などと呼ばれるものに到達するんだが。〔……〕皆不幸の穴倉へ、新聞の泥へ、出版業者の沼へ落ち込んで行く。そして乞食になり、おこぼれにありついて生きていく。伝記の記事や与太話、パリ便りなんかを新聞に書くか、

売れるまでに時間のかかる傑作より、二週間で書きなぐったくだらないものを好む、さもない本売りに注文された本を書いてね。蝶になる前に踏みつぶされてしまった青虫たちは、恥辱にまみれ、手を汚しながら生きていくしかない。〈コンスティテュションネル〉、〈コティディエンヌ〉、〈デバ〉といった新聞の総督に命令されたり、出版業者にすり寄られたり、または嫉妬深い同業者に頭を下げられたりして、たいていはたった一度の晩飯をおごってもらうくらいのことで、新しい才能に噛みつきたり持ち上げたり。障害を乗り越えて知恵を絞って記事を書いたものですよ。とある悪党のためにね。そいつは自分で書いたふりをし、そうした試作品の記事を踏み台にして文芸欄の記者に成りあがっていった。なのにあいつは俺を協力者と見なししていないし、百スーすらよこさない。それでもやつに手を差し伸べ握手せざるをえないんだ〔……〕

要するに、文学では仕事をするのが成功の秘訣ではない。他人の仕事を搾取するのが肝心なんだ。新聞の社主たちは土建屋、おれたちは石工といったところかな。だから凡庸な人間の方が早く出世する。生きているヒキガエルを飲み下すとか、すべてにあたって忍従するとか、文壇の暴君たちの低劣きわまる欲にこびるとかいったことは、凡庸な人間なら何でもないことでしょう。リモージュ出身の新米エクトール・メルランなんかその一人。中央右派の新聞で早くも政治欄を担当し、うちの零細新聞にも寄稿しているあいつです。とある編集者の帽子が落ちたのを、あいつは背をかがめて拾い上げてましたよ。誰の機嫌も損ねないから、あの若造はライバルが対立し合っているすきまにうまく入り込んでいくでしょう。〔……〕

これから言う言葉を口にしようという勇気のある者は一人もいない。心を深く傷つけられた人間の苦しみを込めて、わらの上のヨブが叫んだようにおれは叫びたい。『わが腫れ物を見よ!』と〔……〕

傑作をものするために、きみはペンにインクをたっぷりつけて、優しさや活力やエネルギーを心からくみ上げ、情熱や感情や雄弁の形にして繰り広げるだろう。そうさ、行動する代わりに書き、戦う代わりに歌う。作品の中で愛し、憎み、生きるんだ。でも自分の富は文体に注ぎこみ、黄金や緋色で登場人物を描写し、戸籍簿と張りあって、アドルフとかコリンヌとかクラリッサとかマノンとかいう名の人物を生み出したことに満足し、ほろをまとめてバリの町をそぞろ歩くとしても、そしてそうした人物に命を与えるために自分の健康や胃を損ねたとしても、そういう創造物はジャーナリストによって悪口を言われ、裏切られ、売り飛ばされ、忘却の入り江に押し流され、親友たちからも葬り去られてしまう。創作した人物がよみがえる日を待つからいいって？ 誰がそうしてくれます？ いつ、どのようにして？〔……〕

### 〔三番目の出版業者〕

「まず五十フランの未払いがあるぞ」とルストーは続けた。「そこからここに傑作という評判の『エジプト旅行記』が二冊ある。版画がどっさりだから売れるぜ。俺がこれから書評を二つ書くってんで、フィノはもう金を受け取ってるんだ。〔……〕

ふん、どうやっつけるかご存じないのか。『エジプト旅行記』のときは、本を開いてページも切らずに拾い読みし、文法の間違いを十一箇所見つけた。一段分の記事はこう書く。この作家はオベリスクとかいうエジプトの石ころに刻まれたアヒルの言葉は学んだかもしれないが、自分の国の言葉がまるっきりわかっていない、それを証明してみよう、とね。それからこうも書ける。博物誌とか古代美術などの話よりも、エジプトの将来とか文明の進歩とか、エジプトをフランスに帰属させるための方法とかいったことについて語るべきだった。フランスはエジプトを征服し、そののち失ったが、精神的な影響力によってつなぎとめておくことは今なお可能である、といった具合。それを愛国主義的な放言で飾り、全体にはマルセイユ、東方地域、わが国の通商についてべらべらやっておく」

「でも万一作者の論旨がそのとおりだったら、どうするんです？」

「それだったらこう書く。政治なんかで退屈させるかわりに、芸術を論じるべきだった、あの国を素晴らしい景色や領土の様子という観点から描くべきだった、とね。批評家はここで嘆いてみせる。どこもかしこも政治ばかりだ、もういいかげん、うんざりであるとか言ってるね。航行の苦勞、狭い海峡をすり抜けて行く時のスリル、赤道通過の陶酔など、旅行に行くこともできない人間が知りたがっていることを説明してあった、以前の楽しい旅行記が懐かしい、と書く。で、そうしたものを持ち上げる一方で、渡り鳥やトビウオ、漁、地理上の地点の測定や浅瀬の確認みたいなものを、大事件さながらに称賛する旅行記作家もこき下ろす。深遠で、神秘的で、わけのわからないものに人は引きつけられるだろう。そういうまるっきりチンプンカンプンな科学的事柄を、作家に要求する。読者は大喜び。これが読者サービスってものさ。」

小説の方だと、フロリーヌが大の小説好きでね、あらすじを話してくれるから、俺はあいつの意見を参考にして記事をでっちあげる。くさい文章にあくびが出たと言ったなら、その作品に敬意を払い、版元にもう一部くれとせがむ。好意ある書評がもらえるならば、と大喜びでよこしますよ〔……〕

### 〔「木造回廊」、木造回廊の書店風景〕

ほら、あれがフィノ。うちの新聞の社主ですよ。おしゃべりの相手はフェリシアン・ヴェルヌーっていう、才能はあるが口には出せない病気みたいなごろつきなんだ」



「おおっ、初演に来たのかい」、ルストーに声をかけるとフィノはヴェルヌーを連れてやって来た。「ボックス席なら、他に回しちゃったよ」

「フローラルに売ったな？」

「そうだよ、文句あるかね？ まあ、席くらい見つけてやるよ。ドリアに何をねだりに来たんだい？ ポール・ド・コックを大々的に売り出すことで話がついたんだ。ドリアは二百部引きうけるぜ。ヴィクトル・デュカンジュに小説一本断られたんだってよ、ドリアは。それで同じ分野の新人作家を発掘したいんだそうだ。ポール・ド・コックはデュカンジュよりも上だと書いてくれよ」

「だけどゲテ座のデュカンジュの芝居を一本担当してるからなあ」とルストー。

「そんなら記事は俺が書いたと言っておけ。おれがさんざん叩きのめしたのを、きみがフォローするという段取りだ。きみには感謝するだろうさ」〔……〕

#### 〔四番目の出版業者、劇場の楽屋〕

「おれたちにとっては命がけの事柄も、幾晩も刻苦勉強して頭を悩ませた問題も、思考の世界をどこまでも駆けめぐったことも、自分の血で築きあげた記念碑も、版元にとってはもうかるもうからないかという問題にすぎないよ。きみの原稿が売れるか売れないか、やつらの問題はそれだけさ。一冊の本は、やつらにとっては、資本を賭けることを意味している。本が立派ならばそれだけ売れるチャンスは小さい。優れた人間は大衆からは抜き出ているわけだから、その作品が成功するか否かは、作品の価値を認めるのに必要な時間がどのくらいかかるかにかかっている。ところが待とうとする本屋なんて皆無だね。今日の本は明日売れなくちゃ。こういうしくみなので、じっくり取り組まないと高い評価を得られないような、内容の充実した本は、出版業者としてはお断りだね」〔……〕

〔ナタン〕「朝は自分の新聞の意見に従い、夜は自分の好きなように考える。夜は記者を皆灰色にする」〔……〕

「ねえ、みなさん」とフロリーヌは三人のジャーナリストの方を向いて言った。「明日はどうぞよろしく願いしますね。今夜は馬車も用意してあるの。みなさんを謝肉祭の最終日みたいに酔っ払わせて、送ってあげるつもりだから」〔……〕

#### 〔薬局雑貨商の利用法〕

〔フィノ〕「なあ、ドリアから約束をもらったよ。例の週刊新聞の所有権をぼくは三分の一持つことになってね、三万フラン出すことでオーケーしたんだが、その代わり編集長兼社長はこのぼくという条件なんだ。うまい話だろ。ブロンデから聞いたことだが、ジャーナリズムに規制を加える法案が立案中で、今出ている新聞だけが残されるらしい。半年もたつと、新しい新聞を企画するには百万フランかかるようになるだろう。だからさ、君

がぼくの負担額の半分、つまり全体の六分の一をマティファに買わせるよう画策してくれたら、今やってる小新聞の編集主任の地位をきみにゆずるよ。月給二百五十フランだ。ぼくの名義人になってくれ。ぼくは今までどおり編集の指揮を取り、利益は確保しておきたいが、表面きは編集にタッチしていないように見せたいんだ。きみの記事は一段につき百スー払う。こうすれば一日に十五フランがきみの懐に入る。記事には三フランだけ払って、ただの原稿を採用すればね。これで月四百五十フランの上乗せだ。

だがぼくも、紙上で好きなように人物や事件を攻撃したり弁護したりする権利は持っておきたい。ぼくの政策とぶつからないかぎり、きみが自分の憎悪や友情を満足させるのは勝手だ。将来ぼくが与党になるか、王党派になるか、今のところまだわからん。それに自由派との関係も裏で持っておきたいし。きみがいい子だからこそ、全部打ちあけるんだぜ。今扱っている議会関連の記事は、きみにたぶんゆずることになる。それまでぼくが続けていくのは無理そうだからね。

というわけで、このちょっとした取引のためにフロリーヌに一肌脱いでもraitたいんだ。薬屋を口説くよう、あの子にお願いしたいんだよ。金が払えない場合、四十八時間以内に解約しなくてはならないからね。ドリアは残りの三分の一を印刷屋と紙屋に三万フランで売った。当人は三分の一をただで手に入れ、一万フランもうけやがった。全部で五万フランしか出してないんだからね。だが一年後に、この新聞は二十万フランで宮廷に売りつけられるぜ。噂されているように、宮廷が頭を働かせて、新聞を骨抜きにしたがっているというのならね〔……〕

これからオペラ座に行くよ。明日はひょっとしたら決闘かな。將軍たちとねんごろな二人の踊り子をこてんぱんに叩きのめす記事を書いて、Fと署名してやるつもりなんだ。オペラ座をぶっ叩いてやるぞ。ガツンとね」

「へえ、そうなの？」と支配人。

「そうですとも。みんなケチケチしやがって」とフィノは答えた。「ボックス席は取り上げる、五十口の購読は断るって連中ですよ。オペラ座に最後通牒を叩きつけてやりましたよ。月に百口の購読申込と、四つのボックス席をよこせてね。〔……〕」

「おたくにかかっちゃ、わたしらは破産ですよ」と支配人。

「割り当てられた十口の購読がお気に召ませんか。好意的な批評を、二つも〈コンスティテュションネル〉に書いてあげたのに」

「いやいや、おたくに文句はもうしてませんよ」、支配人は言い返した。〔……〕

「きみって」、リュシアンはルストーに言った。「驚きですよ。フロリーヌさんを使ってあの薬局店主に三万フ

ラン出させる。しかも薬局店主には、フィノが三万フランで買ったばかりのものの半分ぼっち分け前しかやらない。きみはそれでもいいんですか?」〔……〕

「お坊ちゃま、きみはいったいどちらのご出身なんだね?」〔……〕

偶然のおかげで、おれが二年待ってやっと手に入れた奇跡を、きみは一日でつかもうとしているんだよ。なのに、手段がどうのこうのってあら探しをするのがそんなに面白いかい? まったくもう、きみには才気がありそうだし、この世界で知的冒険に乗り出すには必要な、自由な考え方もできそうなのに、いやらしいことを考えながら卵を食べたことを悔いる尼さんみたいに、うじうじしちゃって……。フロリーヌがうまくやれば、おれは編集長になって二百五十フランの定収が入る。大劇場を担当し、ヴォードヴィル小屋はヴェルヌーにまかせる。きみはおれのあとを引き継いで、大通りの劇場全部にもぐりこむ。そしたら一段三フランだぜ。一日に一段書くとすれば、月に三十段だから九十フランになる。バルベに寄贈本を売って六十フラン、それから担当の劇場に毎月十枚チケットを要求する。これが全部で四十枚。演劇専門のバルベみたいなやつを紹介してやるから、それを売れば四十フラン。〔……〕

もちろん、芝居をただで見られる楽しみは言わずもがなだ。とはいえ楽しいって、やがては飽きてくるけどね。とにかく四つの劇場の楽屋に自由に出入りできるから。最初の一、二カ月は厳しく辛辣なことを書くんだ。そうすれば、ご馳走とか、女優も来るパーティーへの招待とかが引きもきらなくなって、きみはへとへとさ。先方の愛人たちもちやほやしてくれる。〔……〕

五時にはリュクサンブール公園で途方にくれていたきみが、フランスの世論を支配する特権的な百人の仲間入りをしようとしているんだ。もしうまくいけば、三日後にはきみは警句を三十も書いて、それを一日に三つずつ印刷させ、誰かに人生を呪わせることもできる。担当劇場のどの女優相手だって、好きなときに楽しめる。いい芝居がこけるのも、駄作にパリジゅうの人間が馳せ参じるのも、きみの力次第。ドリが一文も払わず、『ひなぎく』の印刷を断るようなら、自宅に呼びつけて思いっきりこべこべさせ、二千フランで買い取らせることもできる。才能を発揮し、ドリが投資している仕事とか、もうけを当てこんでる本とかを叩きのめすような記事を、三つの新聞それぞれに食らわせてやるんだ。あいつはきみの屋根裏部屋まではいあがり、コバンザメみたいに張りつくぜ。それから小説、今ならていよく追い払う出版業者たちも、行列作ってやってくるぞ。ドグローじいさんが四百フランの値をつけた原稿は、四千フランにまでせり上げられる! ジャーナリスト稼業のうまみはこういうところにあるんだ。だから新参者が新聞に近づくのを、おれたちは妨害するわけさ。入りこむには、才

能がものすごくあるというだけじゃ足りない。よっぽど運が良くなきゃ。それなのにきみは自分の運をとやかく言ってる! もし今日おれたちが〈フリコトール〉で出会わなければ、きみはあと三年は待ちぼうけ、さもないとダルトスみたいに屋根裏部屋でひもじく暮らしていたかもしれないんだ。ダルトスがベール並みの学者になり、ルソーに劣らない大作家になるころ、おれたちは財をなし、ダルトスの財産と栄光を支配しているだろう。フィノは代議士に、大新聞の社長になっている。おれたちはなりたいたものになっている。フランス貴族院議員にでも、借金でサント・ペラジーにおちこまれた囚人にも

「そしてフィノはその大新聞を、一番気前のいい大臣に売るわけですね。ちょうど、金をもらってバステイエヌ夫人の店をほめ、ヴィルジニーさんの店をけなすみたいに。最初はほめていたはずの帽子よりも、バステイエヌ夫人の帽子の方が上等だなんて広告してね」

リュシアンは〔……〕言った。

「きみ馬鹿じゃないの」、ルストーはそっけなく言い返した。「フィノは三年前は尾羽うち枯らしていたんだぜ。〈タバール〉なんかで十八スーの晩飯を食い、十フランで近刊案内を書きながっていた。服が体にのつてるといのが聖母懐胎並みに不可解な謎、というほどの風体だったよ。そのフィノが今では十万フランと見積もられる新聞を一人で所有している。有料購読者、つまり本物の購読者と、あいつの叔父貴がしばりとする間接税とで、一年に二万フラン稼いでいる。毎日誰よりも贅沢な晩餐をし、一カ月前には一頭立ての二輪馬車も購入した。そして明日からは週刊新聞を牛耳るというわけだ。所有権の六分の一はただで手に入れ、五百フランの月給をもらってね。それに加えて、ただで書かせた原稿に、社から原稿料を自分がせしめて千フランもうける。きみだって、フィノが一枚につき五十フラン払うと約束すれば、まず記事三本くらい喜んで無料で提供するだろう。〔……〕

社の公式の敵意そのまま従い、フィノに『叩け!』と言われれば叩き、『ほめろ!』と言われればほめる。それならきみの未来は明るいよ。誰かに復讐してやりたいなら、それが友人でも敵でも、毎朝うちの新聞にのせる文章一つで八つ裂きにできるんだ。『ルストー、あの男をとっちめよう』とおれに言ってね。その犠牲者を、週刊新聞がフィノに必要な人間になっていれば、一万か一万二千の読者を持つ大新聞の紙上で、きみがとどめの一撃を加えることを許してくれるよ」

「ということは、フロリーヌはだんなとの取引に成功すると思っているんですね?」頭がくらくらする思いで、リュシアンは聞いた。

「思ってるとも。ほら、幕間だ。あの子に一言言ってくるかな。話は今夜にもつくだろう。いったん仕込んで

おきや、フロリーヌはおれの分まで頭を働かせられるぜ」

「あそこで口をぽかんとあけて、フロリーヌに見とれている律儀そうな商人は、三万フラン巻き上げられるなんて夢にも思わず……」

「また馬鹿なことを言う。巻き上げるだなんて誰が言った？〔……〕あのね、大臣がその新聞を将来買収するとすると、薬屋は半年後には三万フランの出資で五万フランもうかることになるんだぜ。第一マティファは新聞なんてどうだっていいんだ。フロリーヌに喜んでもらえるならね。マティファとカミュゾ（こいつらは事業を共同で行うだろうから）が週刊新聞の出資者だと世間に知れたら、どの新聞もフロリーヌやコラリーに好意的な記事を書くぜ。フロリーヌは有名になって、もしかしたら他の劇場で一万二千フランの契約を結ぶってことになるかもしれない。ようするに、毎月ジャーナリストに貢いでる千フラン分の贈り物やご馳走を、マティファは儉約できるじゃないか。きみは人間も事業もとんとわかっていないようだね〔……〕

〔コラリー〕もう十時になるというのに、一行も書いてないんだからね。ヴェルヌーやナタンに頼んでおくとするか。今度の号で一発かましてやるために、代議士や大法官クリュゾエ、大臣、なんなら味方だってやつつける風刺記事を二十ほど提供しろってさ。こういう場合、必要なら親父でも殺しちゃうぜ。〔……〕」

「ジャーナリストってどういう人種なんだろう？」、リュシアンが慨嘆した。「机の前に座ったら、即才気を働かさなくちゃならないなんて……」

「ケンケ灯をともしのと同じこと……油が切れるまでは」〔……〕

#### 〔小新聞の作り方〕

「ねえねえ、彼女〔チュリア〕はフィノに声をかけた。「あんたのとこの百【十】口の購読は承諾したわよ。営業部にしてみりゃ負担のうちに入らないもの。合唱団とオーケストラとバレエ団に無理やり振り分けちゃったわよ。あんたの新聞はけっこう面白いから、誰にも文句は言わせないって。ボックス席もあげる。ええっとこれが最初の三カ月分のお金」そして紙幣を二枚取り出した。「だからあたしのことを悪く書かないでよ」

「困ったなあ」、フィノが大声を出した。「明日の新聞の冒頭記事がなくなっちゃうよ。せっかく書いた激辛の酷評が使えないとなると……」〔……〕

#### 〔夜食会〕

「わが国に新聞がないことを神に感謝しますよ」〔ドイツ〕公使はちょっと口をつぐんで、また話し始めた。

「〔……〕今夜は、私に免じて爪を引っ込めてくれているライオンや豹と一緒に夜食をしている、そんな気分なんですよ」

「おっしゃるとおり」とブロンデ。「閣下が今晚蛇を

吐き出し、わが国一美しい踊り子のチュリア嬢に毒を飲ましそこなったなんて、ヨーロッパじゅうに向けて報道することもできますし、それについてイヴとか聖書とか、原罪とか最後の罪とかコメントを加えることもできますしね。しかしご安心ください。閣下はお客様ですから」

「それをやったら面白かっただろうな」とフィノ。

「人体や心に発見されるあらゆる蛇について科学的論考を開陳し、それから思う路に外交官について論及するとか」とルストー。

「このブランデー漬けのさくらんぼうのビンにも、何かの蛇が入っていると書くことだってできます」とヴェルヌー。

「しまいには、閣下ご自身が本気になさったりして」とヴィニョンが公使に言った。

「諸君、眠っている爪をめざめさせないように」、レトレ公爵が割ってはいる。

「新聞の影響力や権力は、いまだ黎明期にあります」とフィノ。「ジャーナリズムはまだ子供だが、これから大きくなる。今から十年もたてば、すべてが広告に屈するようになりますよ。思想はすべてを明らかにし、思想は……」

「すべてを萎えらせるでしょう」とブロンデ。

「うまいな」とクロード・ヴィニョン。

「そして何人もの王を作り出す」とルストー。

「そして王政を崩壊させる」と公使。

「というわけで」とブロンデ。「もしジャーナリズムが存在しないのであれば、まちがってもそれを作り出してはならない。だが実際には存在し、ほくたちはそれによって生きている」

「そしてそれによって死ぬでしょう」と公使。〔……〕

「新聞は聖職者の機能を果たさず、党派的な手段に成り下がっている。そして手段を商売にしまった。どんな商売でもそうだが、こうなると信念も掟もない。どんな新聞だって、ブロンデの入ったように、読者に対して好きな色合いの言葉を売る店なんだ。せむしの新聞というものが存在するなら、朝も晩も、せむしの美、せむしの善良さ、せむしの必要性などといったことを証明するだろうな。新聞は今や世論の啓蒙のためではなく、世論におもねるために作られているわけだ。だから必然的に、すべての新聞が卑怯で、偽善的で、おぞましく、うそつきで、殺人的になるわけだ。思想も体系も人間も殺し、それによって栄えるんだ。新聞はあらゆる抽象的存在の持つ利益を得るようになるだろう。悪がおこなわれても、誰の罪にもならなくなる。ほくヴィニョンも、きみルストーも、ブロンデも、フィノも、アリスチデスやプラトンや、カント【カトー】やプルタルコス英雄になったりするんだ。全員が無罪で、どんな汚いことをしでかしても、手を洗うことができる。これを道徳的とい



うか不道德的というかはきみたちの自由だが、とにかくこの現象をナポレオンがうまく説明した。国民公会についての研究中にひらめいた素晴らしい言葉だよ。『集団的犯罪はなんびとにも責任を負わさない』というんだ。新聞が思いっきりひどいことをやっても、個人的には誰も自分が汚れたとは思わないわけさ〔……〕新聞が下劣な中傷をでっち上げたとしても、誰かに吹きこまれて書いたということになる。文句を言うやつがいれば、あけすけに申し上げて失礼いたしましたと謝ればすむこと。裁判沙汰になった場合は、訂正記事を要求しに来なかったんじゃないかと言って逆にこちらから文句を言う。だが訂正記事を要求しに来たらどうするか？ 笑い飛ばして拒絶し、大した罪じゃないと言い張る。要するに、相手が勝つとしても、こちらは犠牲者をとことん馬鹿にしたことに変わりはない。処罰を受けたり高額な罰金を科せられたりしたら、告訴してきたやつのことを、自由と国民と啓蒙の敵であるかのように書きたててやる。某氏が国一番の正直者であると説きつつ、同時にこの某氏は不正を犯していると書く。こうすれば、新聞の罪などほんの些細なこと、新聞を攻撃する人間こそは怪物ということになる。こうして決められた時間で、こちらの思うままのことを、毎日読者に信じこませることができるわけだ。それからまた、新聞の気に入らないことは、何でもかんでも非国民呼ばわりする。そして新聞には決して誤りはない。宗教を叩くために宗教を利用し、国王を叩くために憲章を利用する。司法官に感情を害されたらお返しにぶっ叩くし、司法官が読者に受けているのならよしよしておく。購読者を獲得するためには、涙ちょよぎれる感動話をでっち上げ、ボベーシュ【ハンスヴルスト】のように客寄せをする。新聞は読者の興味を引きつけたり、読者を楽しませたりするためになら、自分の父親だって冗談のネタにになってしまうんだ。本物の涙を流すためなら息子の位牌だって舞台上に置いておく役者〔、恋人のためなら何もかも犠牲にして平気な女〕みたいなものさ」

「要するに、二つ折り版サイズの国民なんだよ」、ヴィニョンをさえぎってブロンデが言った。

「偽善的で、寛大さに欠けた国民だね」、ヴィニョンが続けた。「アテネがアリスチデスを追放したように、懷から才能を追放するんだ。最初のうちこそ名誉ある人々に指導されていた新聞も、才能ある人にはとても無理なくらい辛抱強く、ゴムみたいに気の弱い凡庸極まりない連中に支配されるか、ペンを買取するだけの金を持った町の商人たちの手に落ちるかだろう。そういう現象は今にしてすでに見られるじゃないか。だが十年もたてば、中等学校を出たての若造が自分を偉人だと思いこみ、新聞記者として登場し、先輩に平手打ちをかまし、足を引っ張って地位を奪い取るんだぜ。ナポレオンが報道の自由を規制したのはもっともなことだったよ。反対

派の新聞に担ぎ上げられて樹立した政府のもとでも、その政府が何か新聞に対して拒もうとしたらその瞬間、新聞は今日国王を攻撃しているのと同じ論法、同じ記事によって、自分の樹立した系譜を叩きのめしにかかるだろうね、絶対に。

ジャーナリストに譲歩すればするほど、新聞はいつそう扱いつづくなる。成りあがったジャーナリストに代わって、貧しい餓えたジャーナリストが登場するからね。傷は治療不可能、どんどん悪性になり、どんどん傲慢になっていく。悪が大きくなればなるほど、いっそう大目に見られ、しまいにはかのバベルの塔【バビロン】みたいに、新聞の数が増えすぎて業界に混乱が生じてくる。恩知らずなことにかけちゃ新聞は国王よりさらに上をいき、投機や打算にかけちゃ最もあくどい商売のさらに上をいく事くらい、ぼくたちは皆知っている。毎朝脳のブランデーを売るために、ぼくたちの知力が使い作られてしまうこともね。それでもぼくたちは新聞に書き続けるだろう。命を落とすことを知っていながら、水銀鉱山で採掘する連中のようにね。

ほら、あそこ、コラリーの横の若い男をごらんよ……。何て名前だっけ？ そうリュシアン！ 美男子で、詩人で、おまけに才人だ。さて、あの男はこれから新聞という名の思想の悪書に入ることになる。自分のとっておきの思想をそこに投げこみ、脳髓を干からびさせ、魂を腐らせるだろう。匿名で下劣なこともやるだろう。それが思想の戦争においては、傭兵戦争における戦略、略奪、焼討ち、寝返りなどに当たるからな。あいつも無数の記者と同様、株主連中の利益のために、何らかの優れた才能を使い果たすんだろう。そうした毒の商人たちは、あいつがのどが渴いているなら餓えて、腹がへっているなら渴きで殺してしまうだろう

やつらはこちらの脳みそを飲み干し、ぼくらを不品行だと言って非難するんだ！〕〔……〕

「ヴィニョンの話を聞いて、ぼくが何を連想したか、わかるかい？」、ルストーがリュシアンを示して言った。「ペリカン通りの太った女の一人が、中学生に向かって言うだろう。『坊や、こんなところに来るにはまだ若すぎるよ……』」

(『幻滅』、『バルザック「人間喜劇」セクション』第4巻、野崎歓他訳、308～418ページ。)

## 【付録2】クラウドによる『ルイ・ランベール』からの直接引用

\* 『ルイ・ランベール』からの引用は、『炬火』668-675 (1924年12月)号にて「H・ド・バルザック『ことば』」*Das Wort. Von H. de Balzac* として採録。

「ぼくは一つの言葉に乗り込んで、過去の深淵をたびた

び楽しく旅したよ」と、彼〔ルイ〕は「読んだ本について語りながら、」わたくしにいった。「ちょうど草の切れっぱしにとまって流れのままに浮かぶ虫みたいだね。ギリシャから出発してローマに行きつき、近代のひろがりを横切ったものだ。一つの言葉の一生とその出会った事件を物語ったら、どんなりっぱな本が出来あがるだろう。言葉はそれが役立った出来事から、さまざまな印象を受けたにちがいない。場所が変わるにつれて、いろいろちがう観念を呼び起こしたことだろう。けれども言葉は、魂と肉体と運動という三つの面から考えると、いっそう偉大ではあるまいか。その機能や効果や行為を考慮に入れずに眺めても、言葉には人を沈思黙考の大海に沈めるだけのものがありはしないか。大部分の言葉は、それが外部で表現している観念の色に染められていないだろうか。言葉が今日あるのは、いかなる天才のおかげだろう。一つの単語をつくり出すにも深い英知を必要とするとしたら、そもそも人間の話す言葉は、とって何歳になることだろう。文字の集まりやその形や、文字が単語に与える姿は、今もなおその思い出が我々に残っている無名の人たちを、それぞれの国民の性格にしたがって正確に描き出す。感覚から思考へ、思考から言葉へ、言葉からその象形文字的な表現へ、象形文字からアルファベットへ、アルファベットから文字で書きしるされた雄弁への移り変わりを、誰が哲学的に説明してくれるだろう。文字による雄弁の美しさは、むかしの雄弁家によって選り分けられた一連のイメージのなかにあるのだが、それらのイメージは思考の象形文字のようなものだ。動物の形でかたどった人間のいろんな観念を描いた古代の絵画は、東方の国々がその言語を書くために用いた最初の記号を決定したのではなかろうか。それからまたわれわれの近代語はどれもすべて、諸国民の原始的な言葉、いかめしくおごそかな言葉の名残を分け合ったが、古代絵画は伝統的にかかる近代語のなかに若干の痕跡を残さなかったろうか。諸国民の原始的な言葉のいかめしさ、厳粛さは社会が年老いていくにつれて減じていくし、ヘブライ語聖書においてかくも響きがよく、ギリシャにおいてもまだじつに美しかったその反響も、相つぐ文明の進歩を通じて弱まっていく。およそ人間の話し言葉なるものにひそむ神秘はこの古代の精霊の賜物であろうか。Vrai 【wahr】 という単語のなかには一種幻想的な直線のようなものが存在しないだろうか。この言葉が要求する短い音のなかには、あらゆる事物における真実なるものの純粋な裸形、単純さが見出されないだろうか。この綴りは何かしら新鮮なものを表わす言葉をたとえに使ったが、そこでは一切が感覚に訴える vol 【Flug】 という言葉のように、あまりにも理解を容易にしすぎような単語で問題を説明したくなかったからだ。どの言葉だってやはりそんなものではあるまいか。言葉という言葉はすべて、魂から血筋を引いている生きた力の刻印を押さ

れているが、話し言葉と思考とのあいだにあるおどろくべき作用と反作用の神秘によって、その力をまた魂に返すのだ。まるで男が、自分の愛する女に伝えた愛情を、そっくりまた女の唇から汲みとるようなものではあるまいか。単語は単にその表情だけで、それが衣服として役立つ被造物をわれわれの脳裏に生き返らせる。あらゆる存在物とおなじく単語は、その特性が十分に働き発展できる場所を一つしかもたない。しかしこの主題には恐らく一つの学問全体が含まれているね」〔そうやって彼は、「ぼくたちはおとなすぎるし、子供すぎるんだよ」とでもいうように肩をすくめた。〕

(『ルイ・ランベール』、『バルザック全集』第21巻所収、水野亮訳、228～230ページ。)